

グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文学」

第 18 回 コンフリクトの人文学セミナー

米国とメキシコに展開するトランスナショナルな社会空間と対立する感情： メキシコ人移民の一時帰省の事例

メトロポリタン自治大学人類学科研究員

平井伸治

2008 年 7 月 24 日（木） 17:00 - 19:00 大阪大学大学院人間科学研究科（吹田キャンパス）東館 105 教室

栗本英世（大阪大学人間科学研究科教授）

平井先生はメキシコの大学で研究員として籍を置かれています。たまたま日本に帰国していらした機会にお話いただくことをお願いしました。

移民の問題はこの COE プログラムの前進である 21 世紀 COE プログラムのときから一貫してわれわれのメインテーマの一つであり、メキシコからアメリカへの移民とは歴史的なスパンにおいても規模においても巨大なもので重要なテーマではないかと思えます。今日の司会は平井さんと長年のご友人である、本 COE プログラムの助教である石田先生です。

石田慎一郎（司会：大阪大学大学院人間科学研究科 GCOE 特任助教）

GCOE の石田です。平井先生はメキシコから先週の土曜に日本に来ていて、この機会に阪大でお話いただくことになりました。トランスナショナルリティ研究の報告書、出ているものを読んでいらしてきているようなので、その内容をメトロポリタン自治大学のゼミなどで議論をされているようなので、今日はいい交流の機会になればと思います。今日は一時間お話しいただいた後に、一時間質疑応答の時間をとりたと思います。それでは平井先生お願いいたします。

平井

私は 10 年前メキシコの大学院で勉強を始め、その際トランスナショナリズム研究を専門とするフェデリコ・ベセレール（Federico Besserer）先生というメキシコ人の人類学者の下で研究を行ってきた。ベセレール先生は 90 年代中頃からカリフォルニア大学リバーサイド校人類学科のマイケル・カーニー（Michael Kearney）と共同研究をおこなってきた方である。ゼミの中で共同研究の目的とは、学部生や大学院生の卒業論文ないし博士論文を書くための調査の際に支援するというのが目的であり、私自身そのゼミからでた博士第一号となった。去年の 11 月に博士課程は無事終わることができ、われわれが行ってきた共同研究は一段落したが、その後世界各地で行われてきたトランスナショナルリティ研究、もしくはトランスナショナルなどのつく研究と比較して、われわれは何か新しいことを言っているのだろうかという反省があった。石田先生のほうからトランスナショナルリティ研究の報告書などを送っていただき、私のほうから日本では

こうした研究を行ってきたよさだという説明をおこなった。その際われわれが勉強する点などがおおくあるため、今後交流できる機会が増えていけば良いと考えている。

今日のテーマは主に修士課程博士課程を通じて、私がカリフォルニアで調査をおこなってきた事例研究について説明する。タイトルは「米国とメキシコに展開するとトランスナショナルな社会空間と対立する感情」であり、最初にトランスナショナリズム研究について説明し、このトランスナショナリズム研究の中でこれまで議論のベースになってきた社会空間の新しいモデルについてモデルの特徴や問題点を簡単に説明する。その後私が調査をおこなったメキシコ北西部ハロストティラン市から米国への国際労働移動を説明し、移民の語りに現れるノスタルジーの感情について説明する。そして移民がどのような形で一時帰省をするかを説明した後、この一時帰省とそのノスタルジーの感情の関係について述べる。最後に、故郷の住民と移民がどのような形で対立しているかを説明したいと考える。

最初に、トランスナショナリズム研究について説明する。トランスナショナリズムの定義が最初にはっきりとした形でおこなわれたのは、ニーナ・グリック・シラー (Nina Glick Schiller) の 1992 年に出された共著で出された論文においてである。具体的には、出身国と移民先国とをつなぎあわせる複数のソーシャルフィールドを、移民が構築するプロセスとかかかっている。

メキシコで移民研究者やトランスナショナルと形容詞のつく研究者の方たちと議論してきたが、トランスナショナリズムという用語は非常に評判が悪く、誤解を招く言葉であるという意見を聞いた。トランスナショナリズムと言うとき具体的に焦点となるのは、移民現象を契機として出身国と受入れ先の国が実際つながった形で移民が新しい社会空間を作っているということである。トランスナショナリズム研究の中では、いろいろな名称をつけられた社会空間が分析単位として使われてきた。その際、外からでてくる移民、入ってくる移民と意味するような単語は比較的使われる機会が少なくなり、かわりに *migrant* や *trans-migrant*、*transnational migration* などという言葉がより多く使われるようになってきたのである。こうした新しい用語の使い方の意図とは、出ていく移民が国を離れていくプロセス、外から入ってきた移民がいかに受入国によって編入されていくかのプロセスをみるだけでなく、両方見ていこうというものである。ペギー・レヴィット (Peggy Levitt) やシラーが 2004 年に書いた論文の中でキーコンセプトとなるのは、移民が受入国にも出身国にも同時に組み込まれているという事実であり、非常に重要である。私自身人類学に在籍しながら移民研究、トランスナショナリズム研究をおこなってきたが、その際に人類学の中でいまままで議論されてきた世界規模の政治経済システムや人、モノ、お金、情報、シンボル、グローバルなフローについてどのように研究をおこなうか、脱領域化する民族や文化をどのように研究するかという関心に絡めて研究をおこなってきた。

トランスナショナルな社会空間モデルはこれまで様々なものが出されてきたが、主なものとしてここに 4 つあげる。ロジャー・ローズ (Roger Rouse) はメキシコのミチョワカン州の集落からカリフォルニアのレッドウッド・シティに移民するという事例について研究をおこなっており、博士論文の中で “*Transnational migrant circuit*” という概念を出した。その後、マイケル・カーニーとナーゲンガスト (Carol Nagengast) が共著した研究報告の中で “*Transnational community*” という概念が提案されている。他に有名なもので、シラー (Nina Glick Schiller) が共著で書いた論文の中で “*Transnational social field*” という概念も

出されている。また “Transnational social space” という概念が、トマス・ファイスト (Thomas Faist) がドイツにおけるトルコ人移民について事例研究をおこなった論文の中で説明された。

私はタイトルの中でトランスナショナルな社会空間という語を使っているが、これはあくまで、今まで出されてきた新しい社会空間のモデルを総括する意味で使っており、具体的にファイストが提案した “Transnational social space” の概念ではない。これ以外にトランスナショナル、プラス何か—バリオ、都市、ビレッジなどいろいろな空間とトランスナショナルという形容詞を組み合わせることによって、非常に多くの空間モデルが出されてきたが、これまでメキシコ、アメリカでおこなわれてきた学会の中で、トランスナショナルをつけないとインパクトが少ないという事情があり、内容は別として多くの頻度でトランスナショナルな社会空間というモデルが提唱されてきた。実際トランスナショナルという単語が使われていても、内容自体は外に出て行く移民、immigration についてしか研究していないというものもあり、内容自体は従来の国際労働移動の研究と変わらないというものもある。

こうしたトランスナショナルな社会空間モデルを色々比較し、特徴として言えるのは、まず国境を越えた社会関係のひろがりについて強調する概念であるということ。人、モノ、お金、情報、シンボルなどが循環している状況を示しているものであるということ。受入国における、出身国の文化的実践が継続しておこなわれているということも、こうした概念の中で指摘されている。受入国と出身国を結びつける制度、社会実践、組織、宗教、政治活動、経済活動などが研究の主な対象となっているものも非常に多い。こうした4つの特徴から言いたいことは、受入国と出身国の間の社会的距離というものが縮小されているという現状であり、いろいろな研究者が指摘してきたことである。いままでの移民研究と何が一番違うかという点、受入国の支配的な文化に移民というものが同化されているのではなく、故郷と類似した生活空間を構築し受入国と出身国に同時に組み込まれているということである。

いくつかある問題点の中から、具体的にここでは二点指摘する。今までこうしたトランスナショナルな社会空間モデルを提案してきた先行研究の中では、文字通りの意味で越境するものが研究対象となっており、その概念を定義する際に、故郷というものがトランスナショナルな社会空間の一部をなしているということを説明してきた。しかし、移民しない地元の住民は、国境を越えた新しい生活空間の構築にどのような形で参加しているのかということがはっきりと説明されなかった。そのため、社会的に調和の取れた葛藤もなくコンフリクトもなく統一された社会空間というイメージで、Transnational community なり、Transnational social field、social space なりの移民が生活する空間が捉えられてきた。私自身が修士・博士課程で研究をおこなう中で、移民のトランスナショナルな実践が故郷の住民との関係に及ぼす影響は何か、移民と故郷の住民の関係に存在する力関係はあるのかという関心で研究をおこなってきた。

次に、メキシコのハリスコ州、北西部に位置するハロストティトラン市から米国への国際労働移動について説明する。ハロストティトラン市は、略してハロスと地元の人に呼ばれる。16世紀に設立された集落であり、メキシコでもスペイン人入植者が多く入ってきたため、混血化はあまり進まなかった場所である。伝統的には酪農社会だったが、今はオフィシャルなかたちでは都市として定義されている。人口は2万1660人だが、曖昧な数字であり、実際には地元に住んでない人間も入っているため、大体2万人前後である。もしくは8、9月に帰省する人びと、地元の聖人祭りやカーニバルなどがおこなわれる時期には人口は増

える。アメリカへの国際労働移動は100年以上前から始まった。1906年にハロストティトラン市で出された市の報告書の中で、アメリカへの移民が多すぎてこの街の中で労働力が不足しているという問題が記載されていた。これまでおこなったインタビューによると、米国への移民の現象は、やはりその頃からはじまったようであることが分かってきており、ハロスは大体100年以上の移民の歴史を持っている。メキシコ政府とカトリック教会の対立が起こってその内戦に巻き込まれないように、難民という形で1920年代後半にかなりの住民がアメリカにでていった。その際、今までカリフォルニアなどで鉄道建設の労働などにかかわった人たちにとっては、難民として逃げ延びる場所として、これまで家族の誰かが労働していた場所というのがひとつのオプションになってきたのである。

ただし、1929年から始まったアメリカの大恐慌以降、大規模な形でメキシコに帰国することになるが、自主的だけでなくメキシコへの強制送還という形で戻ることになった。こうしたかたちで20世紀最初の国際労働移動が始まった。1940～60年代まで、メキシコとアメリカの間でブラセロ・プログラムという合法移民のプログラムが締結され、おもにカリフォルニア、アメリカの農業地帯で労働力を確保するという理由で多くの移民が国境を渡った。ハロスから出た人たちも例にもれず農業労働に従事してきたが、そのことは実は移民らにとっては不安定な生活を引き起こすものであった。夏場、収穫の時期までは仕事があるが、それが終わると故郷に戻らなくてはならないという条件があり、継続してアメリカで生活してその後もお金を貯めることが可能である環境を作るには、都市に出なければならなかった。合法的に移民として国境を越えたとしても、その後そのままアメリカに残って非合法移民として都市部で生活するという移民も50年代中頃から始まった。1960年代後半以降は、非合法移民という形で大量にハロスからアメリカに出てくるようになり、都市部で安定した仕事が見つかったから家族を呼び寄せて定住化するという傾向が強くなってきた。60年代以降はメキシコ農村部からアメリカ都市部にでていく移民が一般的な傾向となり、80年代以降にはこの移民は定住化する形になり、家を購入したり、自分でビジネスを起こしてメキシコ食品を売っている雑貨店や、工場を開いて中小企業家となる移民も出てきた。また80年代以降非合法移民も増加し、子どもがアメリカで生まれてアメリカ市民権をもったものの、親族になるということでビザもとれるようになり、80年代以降移民法が変わってグリーンカードを入手することなどが可能になった。

こうしたかたちでハロスからアメリカへの国際労働移動は100年以上の歴史を持ち、主として、カリフォルニア州のサクラメントやロサンゼルス、オレンジ・カウンティなどに多く住んでいる。100年以上たったとしても故郷とつながりを決して失うこともなく、国境の両側に家族のメンバーが広がったとしてもいまだに社会的な関係を維持している。個人的な実践、家族への送金や、定期的な、たとえば故郷の祭りの際の帰郷、手紙や贈り物によって故郷とのコンタクトをとるだけでなく、移民が作った同郷人の組織の活動やカリフォルニアの都市部で移民たちが集まっておこなった守護聖人の祭りなどを通じて、シンボリックな形で故郷とコンタクトをとるようになってきた。1世だけでなく2世、最近では3世なども、自分はカリフォルニアで生まれてもハロスの人間なのだとすることが多く、メキシコ人というアイデンティティだけでなく、ハロスの人間であるというアイデンティティを表明することが多くなってきている。両親に連れられて故郷に戻り、自分と同じような境遇で故郷に戻りたいとこや友人などと遊んだり、ハロスで彼女を作ったりしているうちにハロスの人間であるというアイデンティティが芽生えてきたのだという。

社会的な距離が縮まったトランスナショナルな世界に生きている移民だが、故郷を語る際にノスタルジックな表現を用いる。移民研究をしていく中で、移民が故郷とのつながりを構築し、強化する動機はノスタルジーであると多くの研究者が指摘してきたが、真剣に研究されることは、特にメキシコからアメリカへの移民についてはあまりなかった。ノスタルジー、なぜ故郷の近くに生活しながら故郷を懐かしむのかということは、私が移民研究を行なっていく中で理論的にどう説明すればいいか困った点である。「ここ」と「向こう」の距離を空間的に理解するだけでなく、時間的な意味についても理解が必要である。「ここ」は今現在アメリカに住んでいる大都市であり、かれらのいう故郷とは彼らが生まれ育った幼少時に過ごしたメキシコの農村である。それ以外に、故郷と似たような環境に住んでいたとしても、似ていても本質的には違うものだと多くの移民が感じている。社会的文化的なコントラストについて、故郷を語る際に、たとえば物質主義的であるアメリカに対して、人がより人情を感じて生活できるのがハロスであるという。

社会環境が変化することによってもノスタルジーという感情が生まれてきたという考え方もできる。レイモンド・ウィリアムズが書いた本の中で、いかにして「イギリス文学の作品の中で農村を懐かしむ」というような書き方がされてきたかを説明するとき、彼らが幼少時に過ごしてきた農村というのは実は都市化しているという事実について説明したが、ハロス出身の移民も同じであり、都市化によって自分の故郷である農村を失っている。一つ目に、農村である故郷からアメリカの都市部に移動することによって農村を失う。もう一つが、アメリカに行っている間に農村であった故郷が都市に変わってしまったため、牧歌的な風景を持っていた故郷を失うという変化があった。移民が故郷を語る際、故郷というのは彼らにとって聖母マリアの聖像を納める聖地であり、そこからアメリカに移り住んで生活すると、聖なるものから隔たってしまうという語り方をする。

それ以外に、ノスタルジーというのは若い世代や年配の方によって語り方が異なる。たとえば若者にとっては、故郷は恋人を作る場所である。アメリカに住んでいると恋人はできるけど伝統的な男らしさを分かってくれる人は見つけれないため、故郷に帰りたいという語り方をする。また、アメリカ社会では自分はマイノリティであると感じている。給料も安く底辺に位置する人びともメキシコに帰れば、ドルで購入することによって社会的にステータス・アップできるという理由がある。

高齢者にとっては、アメリカでは孫も息子さえも自分のことを役立つ人間としては見てくれないが、故郷に戻れば周囲から尊重されるため、老後はハロスで過ごしたいと語る。

ノスタルジーを語る存在は男性のほうが女性よりも多い。女性は家族に会うために故郷に戻りたいというが、夫と一緒に故郷に戻ることを女性は恐れている。なぜならば、アメリカの生活では週末、夫はいつも家族を連れてピクニックに行くが、故郷では仕事後友人とどこかに飲みに行ったりして、遅くまで帰ってこないなどの理由のためである。また、女性を殴るとアメリカでは罰せられるが、メキシコでは法的には禁止されていても社会的な規範は甘いということも理由となっている。男性は、男を立てるような献身的な態度を見せてくれる女性と結婚したいことや、または家庭で口うるさい妻が故郷に戻れば周りからのプレッシャーで伝統的な女性として行動しなければならないため、一緒に故郷に帰りたくてインタビューで述べた。

故郷というのは、彼らがメキシコ人として、ハロストティトラン市出身者として、自分たちが帰属する

場所として政治的にも社会的にも彼らがエンパワーメントできる場所だという語り方もする。ノスタルジーについての議論をする際に、「疎外感」という言葉が用いられる。ヘーゲルとマルクスが疎外感について議論しており、自己実現を可能にしてくれる労働から労働者は阻害されているという。そうした労働者は労働時間と労働をおこなう空間の外で自己実現をおこなおうとする。理想的な自己、生活を定義する故郷の風景やカトリックに基づいた習慣や伝統、生活様式、人間関係、ジェンダー・アイデンティティや社会的アイデンティティ、そういった要素から、アメリカで生活していると自分たちは阻害されていて、アメリカでの自己は不完全でばらばらになった自己であると感じているため、自分が今手に入れることができない要素を取り戻すために故郷に帰りたいという気持ちを表現しているのではないかと私はこれまで考えてきた。ノスタルジーとはそうした意味で、移民労働者としてアメリカ社会で阻害されている人びとが、今とは異なる社会的存在になりたいと願う欲求と考えることができる。

次に移民の一時帰省について説明する。8月に守護聖人の祭り、2月にカーニバルがおこなわれるが、その際にアメリカから大規模な形で移民と家族が帰ってくる。この帰省は80年代から急に増えた。これまでアメリカで農業労働していた際に8月は収穫と重なって帰ることはできなかったが、都市部で生活して夏休みがとれるような仕事を移民が探してきた努力が実り、多くの人が都市部に住んで8月に長期休暇をとれるようになったということが一つの理由としていえる。それ以外に、雇い主が地元の出身者の場合、地元の祭りのときに休みを取りやすいということもあり、40、50、60年代に移民した人たちが80年代以降定年退職して故郷に帰る時間がとりやすくなったということもいえる。これまでになかった形で米国に移民する人が増え、1世らの子供である2世、3世が思春期を迎えたり成人したりすることによって、恋人を探すためにいとこや友人と故郷に帰るようになったのが80年代以降である。他、80年代以降ビザをとって合法的に入国する移民が多くなり、一時帰省ラッシュが8月と2月にみられるようになった。この帰省によって、一時的に人口がハロスで増加する。正確な数値は市のほうでは出していないが、大体1万人前後が一週間の間に、祭りの際に増えているのではないかと市の職員は考えている。一時帰省する際に、一人当たり2000~6000ドル使うことになるが、開きがある理由はビザを持って合法移民として米国に入国できるか不法就労者かによって変わってくる。大体旅費と故郷で使うお金が2千ドルとして、不法就労者の場合はそれにプラスしてコヨーテという密入国斡旋業者に払うお金が3000ドルほどかかるので、一人あたり6000ドルほどの出費になる。大量の出費が祭りの際におこなわれるため、バー、レストラン、土産屋、ホテルなどの売上げが伸びて、8、9月が一年の中でもっとも収入が高いと地元の商業セクターの人は言っている。これ以外に、ローカルフェスティバルでも移民向けにおこなわれるものが増えてきた。たとえば教会が主催する、外に出て戻ってきた人たちを対象としたミサや巡礼の儀式などがおこなわれている。

一時帰省者はさまざまな呼び方が地元でされている。一つは *migrante* (移民)、*emigrante* (他の国へ出て行った移民)。これらは基本的に市役所や学者が使う言葉だが、一般的には *ausente* (アウセンテ、ここにはいない人) という。それ以外に *norteño* (ノルテーニョ)、北から来た人という意味であり、基本的に移民を軽蔑する意味が含まれている。一時帰省とノスタルジーに関して、ノスタルジーは故郷に戻る理由と密接な関係を持っており、故郷のフィエスタ (*fiesta*)、祭りにたいするノスタルジーが一時帰省の理由であるとして、多くの移民が語る。フィエスタは家族、親戚、恋人、友人と再会する機会であり、アメリカに住

んでいて2月、8月に故郷に帰れないとその機会を失ってしまう。フィエスタは、儀礼に参加することによって自分の信仰と宗教的アイデンティティや、故郷に対する帰属意識を再確認する機会であり、故郷に帰れないとその機会を失ってしまう。それ以外に、米国社会におけるしばられた環境から開放されて自由な生活を送りたいというのも、故郷に戻る理由となっている。

私は移民する人間が感じ取るのとは別の次元のノスタルジーに注目してきた。たとえば、ノスタルジーとは移民が故郷で売られているものを購入する際の購買意欲になっている、またそうした移民たちに向けて商品を売り込むための広告スローガンになっているという側面がある。ハロスについての本は、アメリカに住むその年故郷に帰れなかった人たちのために家族や友人が買っておいたり、もしくは故郷に帰った移民たちが自分のために購入する本であり、基本的に8月にハロスに関する本や詩、CDなどの商品が毎年8月に売られる。こういった商品の主要な消費者は移民であり、本や歌のタイトルやテーマは基本的に農村の牧歌的な風景を歌ったものや、故郷の女性について美化されたものや、聖母マリアを歌ったものなどがテーマとなっている。これ以外にTシャツなど観光土産などが売られている。彼らは故郷に戻った思い出としてだけでなく、アメリカに帰った際に大切に保管し、ハロス出身じゃない人が訪れた際に見せるなどして、出身地のハロスを語るためにそれらを用いる。

これ以外に移民が聖地としての故郷に対する気持ちを満たすために、ハロスのカトリックが祭りの際にさまざまな行事、イベントを開く。一つとして、アウセンテのための巡礼とミサがある。それ以外に地元の聖母マリア像を複製し、カリフォルニア・サクラメントやロサンゼルス、サンフランシスコから割合近いトゥルロック (Turlock) というところに住むハロス出身者にレプリカの寄贈がおこなわれてきた。地元の神父が米国を訪問したり、毎年7月31日から始まり8月の最初の2週間に行われる守護聖人の祭りのプログラムや招待状を、カリフォルニアに住んでいる移民に送るなどがされている。

これらを通じて移民をハロスに再統合しようとする努力がなされてきている。移民は地元の住民と比べたら大きな寄付をしてくれる重要な信者であるため、ないがしろにできないという事情があった。これまでであった地元の伝統行事も再構築し、移民を故郷の祭りに再統合している。移民のための祈りなども作られ、それを移民に送られる招待状などに載せたりして、より多くのアメリカから帰国した信者が8月16日におこなわれるアウセンテのための巡礼とミサに参加するよう努力がなされてきた。教会や商業セクターがノスタルジーを利用するだけでなく、ハロストティトラン市の市役所も、移民に歩み寄る努力をおこなううえで、パンフレットやポスター、スピーチなどにノスタルジックな表現が用いられる。たとえば聖地としてのハロス、美しい女性が住むハロス、などのイメージがパンフレットやポスターに利用されている。こうしたかたちで移民の描く故郷のイメージが、ハイパーリアルな形で実際にある故郷に再構築・具現化されてきて、ある意味で故郷のイメージと祭りが商品化されてきた。

こうしたプロセスに対する地元の住民の反応は、自分の息子や親戚も、もしくは自身もアメリカに行ったことがあるため良いのではないかと考える人もいる一方で、地元の住民には日々移民しない人もいる。こうした地元の保守層からは伝統文化が破壊されるプロセスとみられ、移民がアメリカからもたらした異質な文化によって故郷が破壊される前の古きよき時代を懐かしむということが、地元で出版される雑誌などによく載せられている。地元で本の出版やプレゼンがおこなわれる際に、表現はやわらかくする形で古きよき伝統の時代をなつかしむような表現が使われる。具体的にどういった行為が問題になっているかと

いうと、祭りの際に若者が自由な雰囲気を楽しむために、歌を歌いながら一晩中街を歩いたり、路上で飲酒行為などをしたりしながら、一晩中街の中を渡り歩くようなことがさかんにおこなわれていることがあげられる。また、おしとやかな服装をしなければならない女性がアメリカの影響によって、ハロスに合わないようなライフスタイルが増えてきたという人がある。こうしたことは、地元保守層が雑誌などに載せて移民を批判するだけでなく、市の調査報告などオフィシャルな文書にもだされている。そこでは、移民がもたらした異質な文化要素が、故郷のカトリックに根付いた伝統文化を破壊しているという語り方がされている。

たとえば、地元出身の歴史家が、ハロスのローカルなアイデンティティは伝統的なカトリックに基づいたものであると提唱し、これらがアメリカに行った移民によって破壊されていると1996年に書いた。この本を読んだある移民が、またそれまであまりにも移民に対する批判が多いという理由から、在カリフォルニアのハロス出身者のコミュニティを代表して手紙を書いた。「我々アウセンテス (ausentes) は故郷に毎年戻りますが、誹謗中傷の的になっていることを大変悲しく思います。こうしたことを言う人は、我々に会いに(米国に)来たことがある人びとではありません。」アメリカで阻害された経験からノスタルジーを抱いて戻った彼だが、皮肉にもノスタルジーがハイパーリアルなかたちで具現化されていくなかで、故郷でも阻害されてしまうという状況がある。これはハロスで私が調査をした際に注目したプロセスである。ある意味でノスタルジーは、移動する人間が感じる感情だけでなく、別のポジションナリティーに位置する、故郷に残された住人が変わりゆく故郷のあり方に対して抵抗を示すといった形で表現される感情でもあると言える。

こうした対立する感情としてのノスタルジーがあるにもかかわらず、一時帰省ラッシュを利用しながら、故郷を経済的にも社会的にも開発していこうと市役所などは考えている。しかしそれらの目論見は、持続可能な開発プランではないのではないかということをおは博士論文の中で論じた。結論としてノスタルジーは個人の語る感情だけではなく、経済的資源、社会資本、文化資本、政治的ディスコースという側面があると思うが、こうしたプロセスを博士論文の中で「ノスタルジーのポリティカル・エコノミー」と呼んだ。トランスナショナルなプロセスは、国境の向こう側に行く、越境するだけでなく、あらたなボーダーを生むプロセスとも考えられる。このボーダーについて、ロバート・アルバレス (Robert Alvarez) がボーダーランドについて説明した論文の中で、「ボーダーとは実際に存在する国境ではなく対立、葛藤、矛盾とかが特徴として現れる場所だ」と述べている。国境を越えるという意味だけで、トランスナショナルを理解するのではなく、またトランスナショナルな社会空間とは調和の取れた統一性のある空間と考えるのではなく、新たな形でボーダーを生むプロセス、そのボーダーによって対立が生まれる—対立—というのは決して経済的、政治的な力と関係なく感情にというレベルにまで及ぶものではないか—というのが、ひとつの結論である。

質疑応答

石田

最初に問題提起として、移動しない人々にとってのトランスナショナルリティとは何かをまず議論したい。二つの、受け入れ側と出身側の両方を捉えていく必要があると考える。つまり移動する人だけでなく、移

動しない人々にとってのトランスナショナリティとは何かというところを最初の問題提起としてあげられていたが、両方見なければならぬということから、実際に移動した人は故郷に対してどういう感情を抱いているか。しかし、また故郷は二つの意味で喪失している。つまり、移動するところに、居たところから生活の場を移すことにより、生活の場から故郷が失われていくという点と、移動している間に故郷が変わっていくという2つの側面があると指摘されていた。

移動しない人にとってのトランスナショナリティとは何かという議論でも、いくつかの面白い議論があった。一時帰省者に対して故郷の人がどう思うかという点でも、マイグラント、イミグラント、アウセンテ、ノルテニョという呼称を見てもさまざまな感情が言葉の中にあらわれているという議論があった。その複雑な感情というのはどこまで問うのかということが、このポリティカル・エコノミーという言葉を使って議論されていた。たとえば、実は反感を覚えつつも一方で利用していくスポンサーという位置づけという部分と、一方で出て行った人にとって、ハイパーリアリティとしての商品化され消費されてしまうハロスというものに対する、実際に生活の場をそこに持っている人たちにとっての違和感など。移動する人にとっても動しない人にとっても、違和感というのがこの発表の中で焦点になっていたと考える。

小林（神戸市外国語大学）

今日の表題であるトランスナショナルという形で議論を展開されていたが、メキシコとアメリカは物理的に国境であり、どこにでもボーダーはある。こういった論理からすれば、トランスナショナルというより、トランスボーダーといったかたちで議論を展開したほうが生産的である。同じような現象はたとえばメキシコ国内で移民した場合などたくさんあるわけで、平井さんのフィールドはたまたまメキシコとアメリカだが、同じような現象を議論する場合ならナショナルというのはあまりこだわる必要はないのではないだろうか。

栗本

今日お話しした現象を聞いていて連想したのは、近代日本の田舎から都市への労働移民である。都市でも同郷者の組織ができて暮れには帰省する。都会での成功者は故郷には戻らない。これは同じ日本という国の中で起きているためトランスナショナルな現象ではないけれども、都市の中などのボーダーを越えていたりきたりしている。私が問題にしたいのは、トランスナショナルという問題をたてることの意味合い、利点である。もちろんメキシコとアメリカで実際国境はあるためトランスナショナルではあるが、ここで起きている現象は近代日本で起きている現象と同じであり、本質的に違うところはあるのだろうか。

奥（大阪大学人間科学研究科 GCOE 特任研究員）

前の二つの質問に関係して、トランスナショナルという問題を考えるときに受け入れ先の国におけるアイデンティティの問題、とくに移民の1世2世3世でアイデンティティの差があるのではないかと。つまり、たとえば3世がハロスのアイデンティティを強調する場合に、それは受入国でのアイデンティティがすでに確立されていて、その後自分のアイデンティティを豊かにするために故郷ではないのかと感じた。

工藤 (大阪大学人間科学研究科 GCOE 特任研究員)

今回はナショナルということで一つ伺いたいことは、私は主に歴史を研究しており、アルジェリアとフランスの関係を見ているとアルジェリアからフランスへの移民が非常に多数存在し、アルジェリアに関しては、政府がアルジェリア移民に対してフランス側でアルジェリア出身者コミュニティとしてまとまって政治的プレゼンスを発揮してほしいとアルジェリア側で発するようになったのは最近のことである。これはフランスという受け入れ側の問題であると思うが、メキシコ側 (国、地域、ハロスの事例) から在米の人々に対する発信されてきたメッセージが、20 世紀の過去 50 年なり 100 年なりの間に歴史的にどう変わってきたのかをお伺いしたい。

それから二つ目の質問だが、今日紹介していただいた在米ハロス出身者とハロスの地域の間、行き違うノスタルジーと伝統—近代の意識、相互構成があるという話は大変興味深かった。こういった濃密な移民と一時帰省との関係はメキシコ全土に広く同じようなケースで見られる現象なのだろうか。あるいはハロスという地域の中の何らかの事情や歴史があるため、とくに強く見られる現象なのだろうか。

上村 (一橋大学)

メキシコの移民研究の隠れテーマとして、アメリカ化というものがあつたと私は考えている。昨年あるジャーナリストが書いたエッセイの中でも、マクドナルドが地元でできたことに対して地元民と帰郷者の意見が全く異なっていたという指摘があつた。それを踏まえると、ハロスにおけるアメリカナイゼーションというのはどうなっているのか。またそれとの関係で、対立する感情というのをお聞きしたい。今回の平井さんの発表は二項対立的な図式でなされているように感じられたが、現実にはもっと複雑であると思う。そのあたりを教えて頂けるだろうか。

栗本

トランスナショナルな移民のソーシャルスペースを研究する場合、研究する研究者は複数の場所で同時並行的に調査することになる。今日はカリフォルニアの話はあまり出てこなかったが、平井さんはアメリカでも調査されており、今回の話は焦点が故郷でのフェスタだったが、もっと日常的に送金や帰省することもあると考える。そういう故郷と出稼ぎ先との関係の相対がよく見えてこなかったため、どのように理解されているのか。また、故郷から見ていると帰省してくる人しか見えないが、出て行った人の全てが毎年帰省するわけではないであろうし、故郷とのつながりが弱くなっている人というのはいないのか。

小林 2 月と 8 月の末に帰ってくるわけだが、町の組織に外の人々はどのように参加するのか。お金を寄付する以外には参加できないのか。カルゴなど。メキシコ南部のほうにはそういう場所が結構ある。保守派は住民のどれくらいか。

平井 保守派はどれくらいいるかという質問に対して。メキシコのオアハカ州出身の移民などはカルゴなどをしなければならぬが、ハロスのケースの場合、基本的に寄付をしなくても参加はできる。しかし、

祭りの際に寄付した金額を公開したくない、という要求が教会にはある。信仰は金銭的なものとは一緒にしたくないという移民側の要請があり、誰がいくら寄付したということはみんな知っているが、公にすることや、自慢することはできるだけしないようにしようという風潮がある。保守派は地元の知識人が中核になる。ハロスの歴史について研究している地方の国立大学で働いている大学の先生や、郷土史家やハロスの文化センターで働いている所長さんなども保守派の中心的メンバーだったが、90年代半ばころからハロスの文芸運動のブームが始まり、最初は移民を厳しい形で批判している。しかし、ハロス出身者の同郷人組織のトップを勤めたような人などが、このような意見はまとはずれであり侵害だ、というようになってから、保守派の誹謗中傷はやわらいできた傾向にある。

しかしインタビューをすると、基本的に意見は変わっていない。複雑な形で対立する感情についてもコメントしてほしいということについて。移民対移民しない地元住民という図式は調査しているとみえてくるし、他の米国へ移民を送り出している地域などでもそうした対立図式が一つの社会問題になっている。こうした中で移民対地元の住民という図式を二つの社会集団の図式とみるよりも、実は世代の問題で見たほうが分かりやすいのではないかと私は思う。とくに批判の対照となっているのはハロス出身の若者であって、若者は結婚する前・後にある程度まとまった金を稼ぐためにアメリカに行くが、アメリカに居ついてしまい、故郷で自由なライフスタイルを経験するために帰ってくるが、それが実は問題となっている構造である。地元の保守派對移民というより、地元の保守派對アメリカから戻ってきたハロス出身の戻ってきた若者といったほうが分かりやすい。自分も昔戻ってきて馬鹿騒ぎして迷惑かけたため、今の若者の気持ちは分かるという人はもっと複雑である。分かるのだが、度が過ぎるとかいった苦情もある。

アメリカでの調査のことはあまり今回話さなかったが、ノスタルジーのポリティカル・エコノミーというものを博士論文の中で私はふまえており、今回話した一時帰省におけるノスタルジーのポリティカル・エコノミーを補完する形で、この感情にもとづいたポリティカル・エコノミーはアメリカにもあるというのが、博士論文の一つのテーマであった。たとえば、アメリカのヒスパニック・マーケットというのは最近になってメキシコ政府、経済学者などの一部の人が、これは実はノスタルジー市場だという言い方をし、この急成長を遂げているマーケットでは移民が抱くノスタルジーが購買意欲になっているといわれる。故郷の文化を継続してアメリカでおこなうにもノスタルジーが非常に重要になってくるということを博士論文でものせた。故郷とのつながりが弱くなる人、10年ぶり、20年ぶりに突然現れるという人も中にはいるが、いろいろな事情でなかなか帰れない人は、何らかの形で、たとえばカリフォルニアで毎年おこなわれる守護聖人の祭りに参加したり、参加できない人は、自宅にある聖母マリア像の前で祈りを捧げるなど、個人的に宗教実践をおこなったりしている。私の調査の中で全く故郷とつながりがなくなった人というのは、故郷のイメージを追うというのが調査方法だったため、断ち切れた人については調査ができなかった。

1世・2世・3世の間でアイデンティティに差があるというコメントについて。自分自身が故郷で過ごした経験というのが重要となってくる。1世が故郷と感情的なつながりを培っていくのは、自分が故郷で育った経験が必要となり、それが強化されてくる。2世・3世に関しては、とくに思春期に男性の場合は父親のように男らしくなりたいとか、男をたてるようなアメリカにはないような、男らしさに対する憧れとか、スペイン語でもっとジョークを言いたいとか、思春期にアイデンティティを形成する際に両親の故郷が顕著な形で立ち上がってきて、友人やいとこと帰省して、新たな形でハロスに対するアイデンティティを培

っていくと思われる。直接故郷とつながりを持たずとも、父親や祖父、祖母やアメリカにハロスからもたらされた写真や友人の里帰り話などが、故郷に対する気持ちをきくことによって、故郷とのシンボリックなつながりが培われていく。

アルジェリア政府がフランスに行った移民に働きかけるというコメントについて。メキシコ政府は近年になってアメリカに行っている移民、アメリカに住む彼らの子孫に対する外交政策を大きく変えてきた。これまでは移民に対して何もしないことが政策だった。そのメリットは、何もしなければ移民は勝手に雇用を見出すことのできない地域から出て行って、政府からの援助がなければ勝手に故郷に送金を送ってくれて、こんなにいいことはないという考えがあった。実際メキシコ移民研究者にも、「何もしない政治」と今でも言われており、そのためメキシコにおける海外送金が観光から得られる外貨獲得を抜いて、今現在メキシコの外貨獲得手段の第二位となっている。第一位は石油である。こうした移民の経済的なメキシコに対する重要な役割がメキシコ政府レベルで近年感じ取られるようになり、アメリカからメキシコに戻る旅行者向けのプログラムが 80 年代後半ころからおこなわれるようになり、税関などを通る際に不法な額の金を取られるなどといったことをなくしたり、在アメリカのメキシコ移民に対する政策などもおこなわれている。近年メキシコ外務省が力を入れているのが、アメリカにおけるノスタルジーのマーケット、メキシコで生産されている商品をもっと売り込めないか、ということで毎年 6 月にメキシコでヒスパニック市場に参加したい企業に対してフォローを行うイベントなどを開いている。

アメリカナイゼーションについて。メキシコではアメリカに移民する人間が多いところでは、アメリカ化しているのではないかと、アメリカナイゼーション以外に「チカーノ化 (chicanización)」、またメキシコが「ノルテニゼーション ((norteñización)しているのではないかとという概念を使う議論もある。さまざまな概念を使う人がいるが、アメリカ化などというタームの使い方は、ただ単にアメリカにあった文化要素がメキシコに入り込んで脱領域化した文化を作っているのではないかと、という議論は非常に単純だと考える。アメリカ化した文化の移動ないし地元の住民が輸送した「アメリカ」であったり、移動しない住民が理想化したアメリカ像だったり、移民が美化したものだったりする。実際のアメリカ文化では同一でないものが入っており、アメリカ化が起こっているという考え方や、アメリカナイゼーション、チカーノ化という概念ではこうした変化のプロセスの複雑さは十分に説明できないのではないかと、とも考えられてきた。

トランスボーダーといったほうがいいのではないかと、という質問に対して。私自身 2001 年ぐらいからトランスナショナリズム研究をテーマとしてやってきて、ゼミでも去年の 9 月ぐらいから、われわれはトランスナショナルとあまりにも言いすぎている、われわれがやってきたことはトランスナショナルという言葉で片付けられるものではなく、われわれはボーダーを生むプロセスもみてきているため、考え直したほうがいいという方針になってきている。まだ具体的にトランスボーダーや、ボーダーという概念を利用して論文を書いている同僚は非常に少ないが、トランスナショナルなプロセスを見るだけでなくその中で生じる不均衡な力関係、葛藤とか矛盾というのが、重要なテーマとしてここ最近われわれがやってきた研究の特徴として考えている。メキシコに戻ったらトランスボーダーというタームのほうがいいのか、別の言い方のほうがいいのか同僚と議論してみたいと思う。

馬淵 (大阪女学院)

私はノスタルジーについてお聞きしたい。平井さんの発表で、語りからノスタルジーのいろいろな側面を7つほど挙げられており、疎外感との関係という語りも示して、興味深きかせていただいた。しかし、ノスタルジーとは構築されたものであり、非常に流動的な、また、ある人にあるときにあらわれてある人にあらわれない、あるときには出現してあるときは消えてしまうノスタルジーが、今日は「堅い」ノスタルジーとして語られてしまったという印象がある。ノスタルジーがいつどういう契機で立ち上がってくるのかということをお聞きしたい。また、さきほどの、伝統が破壊され、古き良き時代をなつかしむ語り方というのは、たとえば世代間でもおこると考える。それをノスタルジーと呼ぶのはどうしてであり、どうしてこれがトランスナショナルなのかということについて、もう少し平井さんの考えを聞かせてもらえればと思う。

赤尾（大阪大学人間科学研究科 GCOE 特任助教）

今の話にもかかわるが、一時帰省ラッシュというのが80年代に始まる理由をいくつか今のお話の具体的な要因につけ加える。おそらくこの時期を境にノスタルジーというものが非常に具体的な形であられるという時だったと思うが、80年代という時期を考えると、より包括的に考える必要があると思う。私は一時帰省ラッシュが起きた物質的な理由として交通網やテクノロジーが発達して、より早く簡単に、手軽に行けるようになったということも関係しているのではないかと考える。

ノスタルジーとの関係でいうと、移民としての存在を合法化されたということも原因の一つだと考える。80年代以前の国際移民というのはその国にいずれは統合されるという移民モデルだったのが、80年代を境にディアスポラ議論が生まれ、どっちつかずの二重のアイデンティティが合法化、合法的なものとなるのもこの時期である。そのあたりの、他のエスニック・マイノリティとの関係をもう少し深めたら、なぜこの時期にノスタルジーが現れたのかということがより分かるのではないだろうか。

桜井（大阪経済大学）

私はグアテマラのマヤの調査をしていて、最近サンフランシスコやロサンゼルスにおけるグアテマラの人の動きに注目している。

メトロポリタン自治大学で研究者がこれをどのように取り上げているのか、平井さんは日本人であるが、日本人研究者がメキシコ人の移動に関して研究することの意味などをお聞かせいただきたい。

平井 ノスタルジーは流動的なもので、ハロス出身者も私も含めて、しょっちゅうノスタルジーの心境を語るのではなく、ハロス出身者に関しては感情カレンダーがあると博士論文に書いたが、とくに8月と2月に非常に強く表れる。それ以外は、普段は故郷のことをたまに思うけれど、そんなにいてもたってもいられなくなるというわけではないということである。フィエスタ、祭りに対する意味づけが強いために8月、2月はノスタルジーに強く浸ってしまうということはある。今日私が説明したようにこの時期にノスタルジーは堅くなると思われる。ハロス出身者の移民の年齢を考えた場合、40年代60年代に多くの数のハロス出身者がアメリカに行ったが、彼らが60歳、70歳代の高齢者として、年齢の問題がひとつ大きいのではないと思う。それ以外にまたハロスの教会や商業セクター、知識人の書いたものがディスコース

としてノスタルジーを利用しだしたのがちょうど 80 年代以降だと思われる。80 年代後半以降メキシコ人移民に対する政策が変わって、それまで移民に対して何もしてこなかった政府というのが、移民に対する国民感情としては国家の裏切り者という見方が普通であったが、徐々に変わってきている。そうした中でおこなわれた政策が、本来流動的であるノスタルジーを堅く固定させていったのだと考える。ノスタルジーが地元のメキシコ国家や地方、市のレベルでの経済開発プロジェクトとして成り立つには、この堅さが重要であると考え。そうした意味で、ノスタルジーをディスコースとして利用して移民に発信するアクターの存在が強くなったのが 80 年代後半である。テクノロジーや交通の発達もあるもちろん考える。

トランスナショナルではなく、トランスポーダーやトランスローカルといった表現のほうがいいのではないというコメントをいただいたが、古いタイプの男らしさ、ハロスの人たちがなつかしむような男らしさ、こういったジェンダー・アイデンティティ、また高齢者が抱くノスタルジー、若者が抱くような自由な遊びの空間としての農村の風景というのを、メキシコでこれまで構築されてきたナショナルディスコースといかに結び付けられるかが問題になってくると考える。

81 年にハロス出身者のインタビューを、メキシコ、アメリカ全土 40 箇所で 200 人近くにおこない、それを編集した本が、ロサンゼルス中心に住むハロス出身者によって出された。それと現在の語られ方を比較すると非常に面白い。半分ぐらいのテーマが、アメリカにおいて政治的にも社会的にも移民を認知すべきだという要求が語られている。もう半分のテーマがノスタルジーの表現にある。今現在移民の話を見ると、最初のテーマが抜け落ちているのではないかという印象を受けた。進歩するために農村から出て成功するという移民たちが抱いていたアメリカンドリームがこの 20 年間で廃れてしまったのではないかと私は考える。農村から都市に行くという進化論だったが、そうした中で農村を捨ててもっと進歩を約束してくれるアメリカに行けば幸福があるというイメージが、数十年間住んできた移民たちにとってはもう通用しない神話になったのではないかと考える。一度生涯の夢を失ってしまった彼らにとっては、労働の時間と空間の外にある外部というのは過去に住んでいた生まれ故郷になり、彼らが今現在アメリカの大都市で満たされない自己を完全にするためには故郷に行き、自らの幸福や理想的な自己になるために取り戻さなければいけない要素を求めに故郷に何らかの形で帰ろうとするのではないかというのが私の考えである。

小林（神戸市外大）

メキシコのゲレロ州で研究をしている。最後にボーダーとかナショナルに関して質問をしたい。現在は国内移民、ハロスから国内の大都市への移動や、メキシコ北西部の大農場地帯への移動などがいくつか挙げられる。今日に関してはトランスナショナルということで、ナショナルなボーダーを越えるという話であったが、国内の移民に関する状況と、影響力というか政治的・経済学的な影響についてお聞きしたい。

平井 ハロスだけでなく、ハロスのあるハリスコ州の高地はアメリカに移民労働者を送り出すだけでなく、州都であるグアダハラハラやメキシコシティにも多くの国内移民を送り出してきた場所である。国内のメキシコ革命やキリスト教徒と政府の間の対立の動乱のとき、メキシコの高度成長期などにそういった近郊の都市に国内移民を出すということがあった。

影響力に関していえば、地元の保守派の意見を支持する人が多い。久しぶりに故郷に帰ったら英語しか話せないようなメキシコ人がいたり、すごい格好をして祭りに参加している者などもいて、私が10代のときはこうだったと言い、アメリカからきた若者やその世代の親に対して批判などがある。教会に対する影響力や、市や政府に対する影響力はアメリカに行っている移民のほうが強く、そのため移民に対していい感情が持てないというのがある。ただ一度地方都市に出て、成功は思ったよりできないがアメリカに行った親戚はうまくやっていると聞いたため、自分もアメリカに行こうということがある。実際私が勤務しているイスタパラバ地区にもハロス出身者がいる。メキシコシティの郊外にやってきて80年代以降アメリカに行ったという人もいる。

それとさきほど抜け落ちていた質問だが、メトロポリタン自治大学人類学科は、メキシコでも文化人類学を勉強できる大学としては有名な場所である。日本人である私がメキシコのことを研究するという、いい意味でも悪い意味でも目立ってきたおかげで、たくさんの意見をいただくことができた。ノスタルジーとかいままで経済学者や統計学者などの学問がやってきたものを、人類学者が近年になってトランスナショナルリティとの研究の絡みで移民研究に関わることがメキシコでも増えてきた。ノスタルジーはずっとブラックボックスだったということで非常に評判は良いものの、移民の学会などで発表する場合人類学者はマイノリティになるが、メトロポリタン自治大学の研究者は何でもノスタルジーとって片付けるといわれて批判されてきた。その中でマイケル・カーニー (Michael Kearney) 及び私の指導教官だったフェデリコ・ベセレール (Federico Besserer) 先生などは Transnational community で有名な研究をおこなってきた。彼らはオアハカ州先住民のアメリカへの移民を研究してきた。オアハカのコミュニティは1000人に満たないコミュニティで、移民に無批判に Transnational community という概念をあてはめるのはどうかと批判されてきた。そうした意味で今回のタイトルは「ハロスとカリフォルニアに展開する Transnational community」にしなかったのである。

栗本

ジェンダーとノスタルジーの関係がどうなっているか。2世・3世、若い移民女性から見たとき、これがどうねじれているのか。彼女らにとって故郷というのは理想的な男性の色をしていると思う。つまり若い女性から見たときのノスタルジーについてお伺いしたい。

平井 ハロスでは毎週日曜、ローカルフェスティバルの時期には毎日恋人探しの儀式が行われている。実は最初にプロジェクトを立ち上げたとき本当はジェンダーの部分が中心になるはずだった。興味を抱き研究を始めたときは私自身独身であったが、メキシコにいるあいだに結婚し、既婚者が恋人探しの儀式に参加して女性とインタビューすることにプレッシャーを感じるようになり、アメリカから来た女性がどう思うのか、そしてその恋人探しに参加して地元に住んでいる従来の女性などがどういうことを考えているかなどについて十分に研究をおこなうことができなかった。

一つには、やはり地元に住む女性もハロスは仕事もなく、でも伝統的な社会的な役割も担わなければならない、早くいい男を見つけて外に出て、向こうに住みつきたいという考えがあるのではないかという印象を受けた。そういう考えは聞いてみないと分からず、恋人探しの儀式のときなどはおとなしい女性なの

かなと思うが、実際アメリカから帰ってくる若者は、ハロス出身者でもアメリカ生まれの女性と比べたらハロスの女性は自分をたててくれる、しかし結婚してアメリカに行ったら変わるよ、とも男性は言う。向こうに行ったら基本的に女性は、アメリカからメキシコに戻らないように、非常に発言力が強くなってなかなか帰れなくなると言っていました。

石田 時間が来ましたので、今日はこれでセミナーを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。